

## 論文概要の和文様式

雑誌におけるタイトル:

Maternal Alcohol Consumption and Risk of Offspring with Congenital Malformation: The Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

妊娠中の母体の飲酒と先天性形態異常の発症について

ユニットセンター(UC)等名: 甲信UC

サブユニットセンター(SUC)名: 信州大学SUC

発表雑誌名: Pediatric Research

年: 2020 月: 11 巻: 頁:

筆頭著者名: 栗田 浩

所属UC名: 甲信UC

目的:

妊娠中の母体の飲酒と出生児の先天性形態異常の発症との関連について検討する。

方法:

1歳時の全固定データを使用して、73,595人の単胎生産の児を対象に、生後1か月までに診断された先天性形態異常(先天性心疾患、男児外性器異常、口唇口蓋裂、四肢形成異常、脳奇形、消化管閉鎖疾患)の発症と妊娠中の母体の飲酒の有無、一週間あたりの飲酒量(エタノール換算)との関連について、多変量解析を用い解析した。

結果:

妊娠初期に飲酒していたが、妊娠に気づいて飲酒をやめた母親は46.6%、妊娠中期・後期まで飲酒を継続していた母親は2.8%であった。他の交絡因子を調整した多変量解析の結果、妊娠中に飲酒をしていなかった母親と比較して、妊娠に気づいて飲酒をやめた母親では先天性心疾患の発症リスクが0.85倍という結果が得られた(調整済みオッズ比0.85、95%信頼区間 0.74-0.98)が、妊娠中飲酒を継続していたこととは関連を認めなかった。また、他の先天性形態異常と妊娠中の飲酒の間に関連は認められなかった。

考察:(研究の限界を含める)

本研究では妊娠中の飲酒と対象となる先天性形態異常の発症との間に有害な関連は認めなかった。母体の飲酒の情報は自己回答であり、飲酒について無回答であった対象者は除外されているため正確な飲酒量とは言えない。今回多量飲酒者はまれであり、量反応関係は解析できなかった。流産や死産は解析から除外しており、この中に重症な先天性形態異常が含まれている可能性がある。

妊娠初期に飲酒をやめた母親で先天性心疾患の発症リスクが低く、妊娠中飲酒を継続していたこととは関連を認めなかった。飲酒量と先天性心疾患発症リスクの間にはJ型の量反応関係があるという報告もあり、先天性形態異常と飲酒量についてのさらなる研究が必要である。

結論:

本研究は妊娠中の飲酒と対象となる先天性形態異常発症との間に有害な関連は認めなかった。妊娠初期に飲酒をやめた母親からの先天性心疾患発症については逆の関連性を認めた。しかし、低飲酒量の集団であることや客観的な飲酒量データではないことを考慮する必要があり、今後のさらなる研究が必要である。